

## 大学図書館員を対象とした研修の現状と課題

### Current status and issue of academic librarians' training

学籍番号：201121729

氏名：永見 聡一郎

Soichiro NAGAMI

大学経営状況の悪化による予算・人員不足により大学図書館員の研修機会の確保は今後より困難になると予測される。加えて、大学図書館員に求められる能力は多様化しており、限られた予算・時間の中で専門的な人材を養成するには効果的・効率的な研修が必要である。現在、大学図書館員を対象とした研修は、数多く行われているものの、その振り返りはなされておらず、研修の担当者も含めた研究は少ない。本研究は、過去の研修の調査及び研修の担当者も含めたインタビュー調査によって、(1) 大学図書館員を対象とした過去の研修の変遷を明らかにし、(2) (従来型の研修の意義の再検討も含めた) 今後の研修の効率的・効果的な提供方法について考察することを目的とする。

過去の研修の調査対象は、「大学図書館職員長期研修」「大学図書館短期研修」国立情報学研究所及びその前身機関が行う研修とした。加えて、『図書館年鑑』における研究集会数、ALA ALCTS Online Learning も調査した。インタビューの調査対象は、大学図書館職員長期研修の担当者及び受講者とした。

調査の結果、主に以下の 6 つことが明らかになった。即ち、(1) 研修の開催数は増加傾向にあり、その開催数には地域差が存在する事、(2) 研修のテーマは時代背景に合わせて変化したこと、(3) 研修が体系化される動きがあること、(4) 従来の集合型の研修は人的ネットワークの形成の役割も果たしていたこと、(5) 討議形式などの参加型の研修は汎用的能力の育成に繋がる可能性があること、(6) 大学図書館の現場では OJT (On the Job Training) は殆ど行われていない可能性があること、である。また、情報技術を用いた研修の有効性に対する意見もあった。

今後の研修の在り方としては、まず情報技術を用いた研修で、基本的知識及び最新動向に関する講義等を充実し、幅広い研修機会を提供する。集合型の研修では、討議形式などの参加型の講義によって、汎用的能力の育成も図ると共に、積極的に人的ネットワークの形成も行う。そして、再び情報技術を用いた研修によって、研修の事後課題や学習コミュニティの構築による継続的な学習に繋げるというようなやり方が考えられる。

今後は、OJT の詳細な実態を把握することや非正規職員の能力・技能向上の機会も含めた調査等が課題としてあげられる。

研究指導教官：逸村裕

副研究指導教官：大庭一郎